

# ますびな

KIZUNA

1

2021年  
令和3年

特集 地域の安全・安心

STOP! コロナ差別



## INDEX

- 2 「温かい共生社会の実現に向けて」  
井戸 敏三 (兵庫県知事)
- 3 「新型コロナウイルス感染症に対する兵庫県の取組」  
兵庫県新型コロナウイルス感染症対策本部事務局
- 4 「新型コロナを学びと成長の機会に」  
森光 玲雄さん (諏訪赤十字病院 臨床心理課長)
- 5 「コロナ禍での被災地支援について」  
成田 亮さん (特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク 事業担当)
- 6 「自分の為よりも世の為、人の為」  
なすびさん (俳優・タレント)
- 7 ふれあいサロン
- 8 「今こそ音楽で心と心の繋がりを」  
佐渡 裕さん (兵庫県立芸術文化センター芸術監督)



## 巻頭言

# 温かい共生社会の実現に向けて

兵庫県知事  
公益財団法人兵庫県人権啓発協会 会長

## 井戸敏三



本格的な令和の時代のスタートとなった2020年。新型コロナウイルス感染症が内外で猛威をふるい、私たちの暮らしに大きな影響を及ぼした一年となりました。兵庫県では、二次感染を防止する封じ込めを徹底しながら、季節性インフルエンザとの同時流行に備え、医療検査体制の充実強化を図るなど、対策に万全を期しています。

一日も早い収束を願い、そして「コロナに負けないひょうご」をめざし、これからも感染拡大防止と地域経済の活性化に力強く取り組んでいきます。さらには、コロナ禍で顕かとなった課題や変革の兆しを適確に捉えながら、ポストコロナの兵庫づくりに県民の皆様とともに挑戦していきます。

コロナ禍では、感染者とその家族、濃厚接触者、医療従事者等に対するインターネット上での誹謗中傷、地域での嫌がらせなどが大きな人権問題となりました。感染への不安や恐怖から、個人の外出や事業者の営業などを私的に取り締まる、いわゆる「自粛警察」と呼ばれる過剰で攻撃的な行動も各地で発生しました。こうした差別的な取り扱いや、他者を一方的に排除しようとする行動は、決して許されるものではありません。

ウイルスの脅威もさることながら、私たちが本当に怖れるべきなのは、差別や偏見が社会にはびこることです。皆様には、人権への配慮はもとより、憶測やデマなどに惑わされない、正確

な情報に基づく冷静な対応をお願いします。

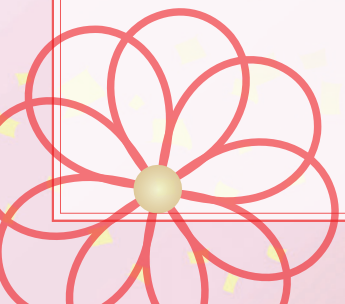
一方、外出自粛などを経験した私たちは、人と人がつながり、互いに支え合って生きるこの大切さを思い知らされました。これを機に、「人権文化をすすめる県民運動」のさらなる推進を図っていかねばなりません。

阪神・淡路大震災からの創造的復興の歩みのなかで培われた「共生の心」。改めて、その原点に立ち返り、相手の気持ちや立場を理解し、思いやる文化を、社会にしっかり根づかせようではありませんか。

約7か月後には、延期された東京オリンピック・パラリンピックの開催が予定されています。世界がコロナを克服し、年齢、性別、障害の有無、文化や言語の違いを越えて、多様性を認め合う絶好の機会となることを願っています。

ともに力を合わせ、誰もが一人の人間として尊重され、地域でいきいきと活躍できる、温かい共生社会を実現していきます。

本年もどうぞよろしく申し上げます。



新型コロナウイルス感染の不安が広がる中、感染された方やその家族、濃厚接触者、医療従事者等に対する誹謗中傷やインターネット上での心ない書き込みなどが問題となっています。

誤った情報等に惑わされず、正確な情報を入手し、人権侵害につながることをないよう、冷静な行動を取ることが大切です。本号では、新しい感染症に対する不安な気持ちに負けず、誰もが安心して暮らせる社会づくりについて考えてみましょう。

## 特集 地域の安全・安心

# 新型コロナウイルス感染症に 対する兵庫県の取組

兵庫県新型コロナウイルス感染症対策本部事務局

令和2年3月1日に県内で初めて新型コロナウイルス感染症の陽性者が確認されましたが、本誌発行時点で早10か月が経過しております。

(※本稿は12月初旬時点の状況を踏まえた内容です。最新の情報は、兵庫県ホームページ <https://web.pref.hyogo.lg.jp/> をご確認ください。)

### 〈本県の対策〉

本県の対策は、①感染者の早期発見、②濃厚接触者等関係者の早期特定、③PCR検査による陽性者の確定、これらからの2次・3次感染の封じ込め、を基本として徹底しています。重症対応110床を含む671床の入院病床と最大700室程度の宿泊療養施設を確保していますが、新規陽性患者の増加傾向を踏まえ、病床と宿泊療養施設のさらなる確保、運用に向け準備を進めています。各保健所による入院調整を基本として、全国に先駆けて3月19日に新型コロナウイルス入院コーディネートセンター(CCC・h Yogo)を設置し、圏域を越える入院等につい



て症状に応じた適切な入院調整や宿泊療養調整を行っています。地域の医療体制をひっ迫させることなく、自宅療養者ゼロを堅持していますが、新規感染者が1日100人を超える状況が続いており、今ここで、感染拡大を食い止めなければなりません。

一方で、感染された方やその家族、医療従事者等に対する誹謗中傷やネット上の心ない書き込みが増えています。お互いを尊重し、助け合い、支えあってこの危機を乗り越えていくことが大切です。

### 〈感染防止対策等のお願い〉

感染防止と社会経済活動を両立できるよう、特に感染リスクが高まるとされる以下の5つの場面に注意するよう呼びかけています。

- ① 飲酒を伴う懇親会等
  - ② 大人数や長時間におよぶ飲食
  - ③ マスクなしでの会話
  - ④ 狭い空間での共同生活
  - ⑤ 休憩室・喫煙所・更衣室等
- 県民の皆様には、ガイドラインに基づく感染

防止策がなされていない感染リスクの高い施設の利用自粛、国の接触確認アプリ「COCOA」(ココア)や注意喚起情報をお知らせする「兵庫県新型コロナウイルス追跡システム」の利用をお願いしています。

事業者の皆様には、ガイドラインに基づく感染防止対策を徹底することに加え、「兵庫県新型コロナウイルス追跡システム」への登録、お店として対策にしっかりと取り組んでいることを宣言する「感染防止対策宣言ポスター」の掲示をお願いしています。

また、本誌発行時点は、例年であれば季節性インフルエンザがピークを迎える時期でもありません。咳エチケットの徹底、手洗い・手指消毒、換気の徹底などの予防対策は共通しています。兵庫の新たな生活様式「ひょうごスタイル」の定着にご協力を願います。

### 兵庫の新たな生活様式 「ひょうごスタイル」を推進しましょう!

- ◆「3密」(密閉・密集・密接)の回避
- ◆身体的距離の確保(できるだけ2m。最低1m)
- ◆マスクの着用、咳エチケットの徹底
- ◆手洗い・手指消毒(手洗いは30秒程度、石けん・消毒薬の利用)
- ◆体温測定・健康チェック(熱や風邪の症状がある時は自宅で療養)
- ◆発症時やクラスター発生時に備え、いつ誰とどこで会ったかを記録

#### 健康相談窓口

新型コロナ健康相談コールセンター  
電話:078-362-9980 FAX:078-362-9874  
受付時間:24時間(土曜日・日曜日・祝日含む)

# 新型コロナウイルスを学びと成長の機会に

諏訪赤十字病院 臨床心理課長 森光 玲雄 さん

現在の社会の状況は

**A** 時代、時代で社会課題は異なるものですが、これほどまでに誰もが自分事として人権課題を身近に感じられる時代は今までなかったのではないのでしょうか。病気にかなりたくないという思いは生存本能の裏返しで誰もが持っているものです。だからこそ、私たちの誰もが偏見、差別に加担してしまふ可能性があり、差別をめぐる問題は新型コロナウイルスによってかつてないほど鮮明に私たちの日常にせまっています。差別問題そのものは新型コロナウイルスで浮かびあがったように見えるだけで、もともと社会に内包されていた現象です。

新型コロナウイルスを「禍(わざわい)」ととらえるのではなく、社会に内包されている人権問題に対する感度を劇的に向上させる絶好の「機会」であり、希薄化した社会が人間性を再獲得していくプロセスととらえれば、この困難をプラスに変えていけるはずですよ。

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」に込められた思い

**A** 令和2年3月に発行した当初は、得体的しれない新興ウイルスによって社会不安が広がっており、これをなんとか和らげねばと思っていました。パニックをおさめ、心の安定を取り戻すためには「新型コロナウイルスで今起きていることはこれで、これから何がもたらされ、どう対処するか」を分かりやすく心構えとして伝える必要がありました。

問題だったのは、当時社会全体が感染を恐れるあまり、心理的な視野狭窄に陥っていたことです。真に備えるべきは大流行時にあらわれる心理・社会的な影響なのに、報道では病気(感染)のことしか伝えていませんでした。多くの人がデマに振り回され、日用品の買い占めに走るなど不安により平穏さを保てない状態でした。一方、エボラ出血熱などで見られた恐れから生まれる差別の問題については、ほとんど啓発されず、危機感がありました。



## プロフィール

日本赤十字社が海外に派遣した最初の臨床心理士。2013年、国際赤十字緊急時の心のケア専門家として指名登録(日本人心理士初)。東日本大震災、ネパール、フィリピンなど、国内外の災害・紛争の現場で「心のケア」にあたる。新型コロナウイルスで日赤コロナ対策本部のアドバイザーに。「コロナ3つの顔」「ウイルスの次にやってくるもの」等を監修し、感染拡大によって引き起こされる差別や社会の分断について警鐘を鳴らしている。

そこで感染症には「病気、不安、差別」という3つの顔があり、身体的感染症とともに心も感染し、社会も感染すると説明し、恐れるべきは一つ(病気)だけでなく、3つの感染症という概念で一つの現象なのだと発信しました。世間の皆さんに時代を見る「目」を広め、冷静さを取り戻すお手伝いがしたかったのです。

新型コロナウイルス感染症と上手に付き合う

**A** コロナという「敵」というイメージがします。「勝つ」「撲滅」といった言葉もよく耳にします。しかし、コロナがない世界を誰もが夢見ますが、ウイルスを完全に排除することは不可能です。どれだけ感染対策を努力しても、リスクをゼロにはできない。時期についても同様で、いつ大流行が終わるのか、誰も正確には分からないのです。私たちは文明化の中でいろんなものを勝ち取り享受して現在に至っているのです。つい何でも思い通りになると錯覚しがちですが、完全に真っ白な

世界というのはありえないことだと思っただけです。

コントロールできないものはそれとして、ありのままに受け止め、今手の中にあるものの中に安らぎや感謝を発見し「足るを知る」ことができたとき、コロナの不確実性の中でも私たちは日々穏やかさを保てるのではないのでしょうか。

県民のみなさんへのメッセージ

**A** 私たちは困難から学び、成長できる存在です。災害や紛争の現場をたくさん見てきましたが、多くの場合、人はもがきながら時間をかけて困難と向き合い、新たな工夫を身につけていきます。

コロナと共に過ごさず今という時代は見通しが持ちづらく確かに厄介ですが、私たちはその中で試行錯誤を重ね、これまでになかった新たな工夫や知恵を身につけることができるはずですよ。「コロナだからこそ気づけること」「今だからこそ取り組めること」を大切にしていきたいと思います。

# コロナ禍での 被災地支援について

特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援  
団体ネットワーク（JVOAD） 事業担当

成田 亮 さん

## ● 災害支援とJVOAD

東日本大震災から間もなく10年が経過します。当時の反省から、被災地のニーズと支援の全体像を把握し、支援のモレ・ムラをなくすための調整を行う全国ネットワークとしてJVOADが設立されました。また、2016年の熊本地震以降の災害対応において、現地のNPOと連携して支援関係者が集まる「情報共有会議」を開催し、行政・災害ボランティアセンター（社会福祉協議会）・NPOや企業等の関係者の連携を促進することにより、被災地の課題解決を進めてきました。

## ● コロナ禍での災害対応

新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念される中、JVOADは、内閣府や全国社会福祉協議会、都道府県域の災害支援ネットワークと協議を重ね「ボランティア・NPO等の災害対応ガイドライン」を作成し、以下の3つの基本方針を示しました。

- 1 被災した地域への支援は、地元の意向を尊重する
- 2 被災した地域内での対応を中心に考える（外部からは遠隔で人道支援）
- 3 行政等から要請がある場合、必要な外部の支援者が現地入りする



## プロフィール

愛知県出身。スポーツの専門学校を卒業後、大手飲食店やテニススクールのマネージャーを経験。広島土砂災害(安佐北区災害VC)、関東東北豪雨災害(常総市災害VC)、熊本地震(熊本市災害VC)では、災害ボランティアセンター設置直後の運営に関わる。2017年1月よりJVOADに入職。複数の災害で現地担当。事務局では避難生活や技術系などの専門委員会を担当。  
※VC ボランティアセンター

とにあるのではないかと考えます。

令和2年7月豪雨では、各地で支援の受け入れの範囲をどうするかが大きな課題になりました。現地の行政等からのボランティアを制限せざるを得ない状況となりました。県外のNPO等についても行政等から要請されるケースは限定的となり、コロナ禍での対応の課題も露呈しました。

## ● コロナ禍での支援活動に 求められること

重要なことは、「必要な支援を届ける」と「被災地に感染を広めない」ことの両立です。この課題を解決する糸口は、地域の災害対応力を高めるこ

被災者の多様なニーズに対応できるように、行政の複数部署、医療・福祉などの専門職、元々の企業などが連携

することでより多くの課題解決に繋がります。そのためには、普段から官民の枠を超えた信頼関係の構築や支援体制を作っていくことが必要です。感染症が懸念される状況下においても、平常時の地域の繋がりが、災害時への最大の「備え」になると確信しています。



# 自分の為よりも世の為、人の為

俳優・タレント なすび さん



## プロフィール

日本テレビバラエティー番組「電波少年的懸賞生活」にて1年3ヶ月間を懸賞のみで生活。被災した故郷福島への復興再生を祈願し、2013年エベレスト登山に挑戦。頂上直前の標高差約100m地点で、下山という苦渋の決断を下す。2014年再び登山に挑戦するが大規模な雪崩発生により断念。2015年に3度目のエベレスト登山を目指す中、途、ネパール大地震に遭遇し奇跡的な生還を果たす。2016年4度目のエベレストに挑戦し、ついに5月19日世界最高峰エベレスト登山を成功させる。以降、俳優としての活動を主にふるさと福島や東北への復興応援、国内の災害被災地応援活動に加え、ネパール被災地支援、コロナ禍下の地元産業応援を続けている。

新型コロナウイルス感染症に関する偏見や差別が問題となっています。その中で、東日本大震災後、福島への差別や風評被害を経験され、福島のために行動されている俳優のなすびさんにお話を伺いました。

**Q** エベレスト登山のきっかけは

**A** 東日本大震災で被災した故郷の福島県への応援活動をする中で、お金や物だけの支援ではなく、心の復興につながる支援はないかと模索していました。そこで、登山未経験の私が世界最高峰のエベレストへの登山に挑戦し、困難に立ち向かう姿を見てもらう事で「なすびがエベレストに挑戦するのならば、福島県民の方々に、色んな事に対して前向きな挑戦を促すきっかけ作りにつながれば」との思いからでした。

**Q** エベレストの登頂時の気持ち

**A** 達成感というよりは、二度失敗し

ても応援し続けてくださった、福島や東北の多くの皆様との約束がようやく果たせたという安堵感と、冷静に、無事に下山しなければならぬ使命感と恐怖感が大きかったです。

**Q** 東日本大震災被災者と新型コロナウイルス感染症に対する偏見や差別について

**A** 東日本大震災の後に「福島県民」というだけで、偏見や差別を経験した方は少なくないと感じています。福島県民として、コロナ禍での医療従事者・感染者の方への偏見や差別が横行している現状を看過出来ません。福島県民だからこそ、あの時と同じ経験をさせてはいけない、今は分断を癒やすのではなく、協調して手を携える時で、その事の大切さを発信しなければならぬと強く思っています。

**Q** 東日本大震災から10年になります

**A** 一つの節目ですが、私は今まで通

り、自分に出来る事を、地味でも地道に、福島県を絶対に裏切らない覚悟で活動をしていきます。また、持論ですが、3月11日は日本中、そして世界中の方々が祈りを捧げ、行動を起こしてください。日なので、私は残りの364日を「被災地の為に何が出来るのか？」といったことを常に自問自答しながら活動することを心掛けています。

**Q** 今後の目標は

**A** エベレスト登頂後に、「次はどこかの山に登るのですか？」と聞かれますが、私は登山家を目指している訳ではありません。本来の目的はあくまでも、福島や東北に元気と勇気、夢と希望を持ってもらうことで、その思いが、私を突き動かしています。これからも全身全霊を賭して、沢山の方々に笑顔にし続けていきたいです。そして自分の信念は貫き通しつつも、皆さんに、福島の「なすび」

として求められる存在でありたいと願っています。

**Q** メッセージ

**A** 私が被災地への応援活動をする根幹には、阪神淡路大震災の時に、被災地に対し、具体的な行動を何も起こせなかったことへの反省と後悔があり、その思いが今も私を駆り立てています。東日本大震災以降に起こった災害の被災地には、なるべく赴くようにしています。

綺麗事かもしれませんが、私は、人は自分の為より、他の誰かの為の方が、より力を発揮出来ると感じています。人と人が助け合い、困った時はお互い様、困っている人がいたら手を差し伸べる、そんな単純なことが普通に出来る世の中になって欲しいと思っています。



# ふれあい サロン

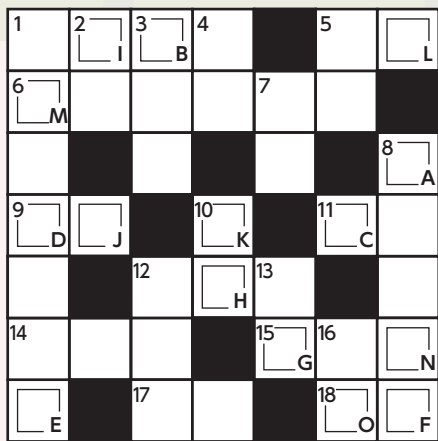
投稿 & クロスワードで

お正月太りもこれで解消?

## 「チューブdeストレッチ」

をプレゼント!

**問** A～Oの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう?



### タテのカギ

- 1 災害が起こったとの想定で行われます。参加しておくといざという時に役立ちますね
- 2 「命の〇〇」「頼みの〇〇」
- 3 物事を自分に都合のいいように主観的に見ること。「親の〇〇〇」
- 4 気が減入ること。「〇〇を晴らす」
- 5 「〇〇来たりなば春遠からじ」
- 7 電気・〇〇・水道が止まるのは一大事です
- 8 二つ以上のものが、一緒に発展し栄えること。「共存〇〇〇〇〇」
- 10 “東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ〇〇ニツカレタ母あれば行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ・・・” (宮沢賢治 “雨ニモ負ケズ” より)
- 12 無事かどうかということ。「〇〇を確認する」
- 13 大したことはないだろうと “〇〇をくくる” のは危険です
- 16 正しければ “〇〇”、間違っていれば “バツ”

### ヨコのカギ

- 1 発明の母です
- 5 “〇〇伝来の土地”は何としても守りたい
- 6 正月7日にいただくおなかにやさしい食べ物
- 9 あとで言い逃れや間違いが起きないようにあらかじめ念を押すことを “〇〇を刺す” と表現します
- 11 “〇〇曲折”がありました。
- 12 今日がだめでも〇〇はきっといい日になります
- 14 国産は瀬戸内海沿岸が主な産地です。漢字で書くと “檸檬”
- 15 建物や門などの造り。「立派な〇〇〇の家」
- 17 有名な斜塔があるイタリア中部の都市
- 18 「〇〇は友を呼ぶ」

11月号の答え

カシコクリヨウソーシャルメディア



■クロスワードの正解者(抽選で10名)に、「チューブdeストレッチ」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。

※投稿掲載時はペンネームの使用も可能です。 ※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

#### ■応募方法・締め切り

はがき、FAX、Eメールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前(ペンネームを使用の場合も要併記)、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。

#### ■応募先

〒650-0003 神戸市中央区山本通4丁目22番15号 県立のじぎく会館内

(公財)兵庫県人権啓発協会「きずな」ふれあいサロン係

TEL: 078(242)5355 FAX: 078(242)5360 Eメール: info@hyogo-jinken.or.jp

\*応募者および投稿者の個人情報は、管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。



締め切り 1月29日(金)必着

## 令和2年度法務省委託事業 震災と人権に関するシンポジウム

～避難所で必要とされる人権への配慮～

【日時】 令和3年1月31日(日)  
午後1時30分から午後3時30分まで(予定)

【形式】 リモート

【対象】 一般市民(事前申込制/参加無料)

【内容】 基調報告「人権の観点から被災者支援・避難所運営を考える」  
パネルディスカッション など

申し込み

公益財団法人人権教育啓発推進センター  
申し込み専用サイトより

URL: <http://www.jinken.or.jp/>

人権教育啓発推進センター

検索

# 今こそ音楽で 心と心の繋がりを

兵庫県立芸術文化センター芸術監督 佐渡 裕 さん

昨年はコロナ禍で多くの演奏会が中止になり、長い時間私もステイホームで過ごしました。人とおしゃべりをしたり、握手やハグをすることも出来なくなったり、感染を最大限予防するのはもちろん最重要だけれど、このコロナの為に、人と人との絆が断ち切れ、心が離れてしまうことが一番怖いと感じてきました。

## 「すみれの花咲く頃」プロジェクト

兵庫県立芸術文化センターは2005年の開館時から、「コンサートホールを心の広場に！」という合言葉を掲げています。その劇場に人が集まることで禁止され、明かりも消える事態に直面した時、何か今出来る事をと、スタッフと真剣に考えて始めたのが「すみれの花咲く頃」プロジェクトです。歌

や演奏の動画を募集し、画面上で私が指揮するオーケストラと共演してもらう企画で、400もの投稿があり、YouTube上での再生回数は20万回を超えました。リモートやSNSでも音楽を多くの人に届けられること、その広がり大きさや魅力に気づけたことは非常に大きな収穫でした。

## コロナ禍での新しいスタイル

夏のプロデュースオペラ「8公演も中止を余儀なくされました。なんとか歌を再生させるきっかけを作りたいと考え「どんな時も、歌、歌、歌！佐渡裕のオペラで会いましょう」公演を7月に実現しました。2名の感染症専門医の監修の下、飛沫のスマーク実験等を何度も重ねました。当日は奏者と合唱団との距離の確保、シールドの着用に加



©Takashi Iijima

え、舞台上にエアカーテンを設営するなど、出演者の安全対策にも万全を期して臨み、これが事実上の劇場とオーケストラの再開となりました。目の前のお客様に生で拍手をいただくことの喜びがこんなにも大きいこと、そしてお客様にも演奏によって目の前の空気が振動していることを感じてもらう、演奏者とひとつの空間を共にして音で心の繋がりを感じられる、ということを再認識しました。これらの感染対策はどこでも実施できるわけではありませんので、劇場やエンターテインメントの世界はまだまだ厳しいのが実情かもしれません。でも大編成のオーケストラは難しくても、小さな編成でお互いの音を聴きあい、お客様もその音楽をかみしめるように耳を傾けるといってコロナ禍での新しいスタイルも生まれていると思います。

## プロフィール

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。パリ管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等欧州の一流オーケストラに多数客演。現在オーストリアのトーンキュンストラ管弦楽団音楽監督。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者。  
オフィシャルファンサイト：  
<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>

## 人と人はしっかりと繋がっている！

この原稿を書いている11月末、12月の「1万人の第九」の公演を、最終的に無観客、一般の合唱を一人も入れずに行うことを決断しました。2020年はベートーヴェンの生誕250年。日本中から1万人が集まって第九を大合唱するというコロナ対策とは真逆のこの企画を、どんな方法でもいいから実現したいと春から様々に検討してきました。第九の中に「世界中の人たちが兄弟になろう、ひとつになる」と宣言する歌詞が出てきます。会場には来られないけれど、今、何干という数の動画投稿で第九の合唱が集まってきています。こんな時だから皆でこの第九のメッセージを高らかに歌って、「人と人はしっかりと繋がっている」と多くの人に伝えたいと思っています。

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。



(公財)兵庫県人権啓発協会 〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内  
TEL 078(242)5355 FAX 078(242)5360 info@hyogo-jinken.or.jp

兵庫県人権啓発協会

検索